氏　　名	菊池　そのみ
学 位 の 種 類	博士（言語学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　10183　号
学位授与年月日	令和　4　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	日本語における形容詞テ形節の副詞的用法に関する通時的研究

主　　査	筑波大学　教　授	博士（言語学）	矢澤　真人
副　　査	筑波大学　教　授	博士（言語学）	大倉　浩
副　　査	筑波大学　教　授	Ph.D.(言語学)	竹沢　幸一
副　　査	筑波大学　准教授	博士（言語学）	橋本　修

論　文　の　要　旨

本論文は日本語の形容詞テ形節の副詞的用法について、古代から現代にいたるまでの過程を主として文献資料（電子化された資料を含む）に基づいて記述し、形容詞連用形（単純連用形）節、ママ節における現象等の周辺現象も参照しながら、その変遷の文法史上の位置づけをおこなった研究である。本論文は「序章」「第１章　先行研究」「第２章　用語と時代区分」「第３章　中古語における形容詞テ形節」「第４章　形容詞テ形節の副詞的用法の変遷」「第５章　〈付帯状況〉を表す「形容詞＋まま」の変遷」「第６章　〈付帯状況〉を表す非対格自動詞節における変化」「第７章　形容詞テ形節の副詞的用法の衰退に関する文法史上の位置づけ」「終章」の９章よりなる。

序章では本論文の目的、論述の手法・手順について示される。目的の骨子が掲げられたのち、その目的達成にあたっての対象、対象を得るための資料の扱い方について説明がなされる。また、理論的な側面として現在の学界水準について概観したのち、文法史研究上において本論文が持つ意義が示される。

第１章では本論文とかかわる先行研究を「古代語におけるテ形節に関する研究」、「古代語における形容詞連用形に関する研究」、「現代語における形容詞テ形節・連用形に関する研究」、「従属節分類に関する研究」の４つに大別し、それぞれについて概観がなされる。これらの先行研究を踏まえて現在の研究状況ついての整理・批判的検討がなされ、本論文のオリジナルポイント、学術的位置づけが述べられる。

第２章では本論文において使用する用語の規定とともに、本論文が採用する時代区分について述べる。用語については特に「節・テ形節」、「副詞的用法」、「付帯状況」を取り上げ、先行研究の指摘を踏まえて本論文の目的に即した各用語の規定がおこなわれる。時代区分についても同様に先行研究を整理し、本論文における議論に適合した時代区分が示される。

第３章では中古語における形容詞テ形節についての共時的分析がおこなわれる。まず、副詞的用法と非副詞的用法とを分類する手順が、先行研究への批判的検討を経たのち示され、中古語資料から得られた形容詞テ形節全てが副詞的用法と非副詞的用法に分けられる。そののち、副詞的用法と非副詞的用法が、量的分布上の様相と語彙的特徴との２ つの観点から分析され、形容詞テ形節の副詞用法が中古語においてはテ形節全体の約３割の用例数を持つこと、動詞との語彙的組み合わせとしては付帯状況を表すタイプが中心となることが明らか

にされる。

第４章では上代～現代までの形容詞テ形節の質的・量的変遷が明らかにされる。素朴なレベルにおいて先行研究によって示されていた、古代的状況において一定の分布を持っていた形容詞テ形節副詞用法が、どのような時期にどのような過程を経て衰退・消滅に至ったのかについて、全時代の資料調査からデータを集め解明される。調査の結果は、時代ごとの用例実数、非副詞的用法との比率、形容詞・（修飾される）動詞の語彙分布、「付帯状況」「空間」「時間」「数量」という意味類型ごとの用例数などの観点から図表として示され、どの時期にどのようなタイプの用例が増減するかが明らかにされる。また大局的に見た場合、副詞的形容詞テ形節の中心となるのは、中古に限らず全時代を通して付帯状況タイプであることが示される。

第５章では副詞的形容詞テ形と意味の近接する、形容詞ママ節（接続助詞ママに導かれる節）の変遷が解明される。分析の前段として、ママ節の形態論的バリエーションが「～ママ」「～ママニ」「～ママニテ」の３種あること、意味の下位類として「随意」「主体の付帯状況」「対象の付帯状況」の３種が区別されることが示された上で用例初出の中古から昭和期までの用例の出現が調査される。調査の結果、副詞的形容詞テ形節の分布が大きかった中古においては、形容詞ママ節において「主体の付帯状況」「対象の付帯状況」を担う確例は非常に少なく、副詞的形容詞テ形節の用例がほぼ消滅した近代以降に「主体の付帯状況」「対象の付帯状況」を表す形容詞ママ節が本格的に使用されるという、両者の相補的関係が明らかにされる。

第６章では付帯状況をあらわし、対象主語（非意志的主語）を持つという点で副詞的形容詞テ形節と共通点を持つ、「対象主語－非対格自動詞」という構造をとるテ形節・ツツ節のふるまいを調査・分析する。調査は主として上代～中世後期について行われ、当該のテ形節・ツツ節が概略上代・中古においては用例が多めで、対象主語が顕在している例も存在するのに対し、中世以降は和歌における用例が散発的に見られるのみであることが明らかにされる。またこの結果を踏まえ、上代・中古において節内に対象主語が現れ、時代が下るにつれて対象主語が許容されなくなっていくという現象は副詞的形容詞テ形節、非対格自動詞テ形節、非対格自動詞ツツ節という、付帯状況を担う節全体に起きていること、この現象が古代日本語に見られる活格的性質の喪失と対応する可能性があることが示される。

第７章では第６章までに行われた調査・分析が、日本語文法史の中でどのように位置づけられるかについて述べられる。第１点として形容詞テ形節と形容詞連用形節が、大局的にみて古い時代においては重なりの多かった分布が、時代が下るにつれて各所で重なりを減らす形で棲み分けられていくと解釈できること、第２点として、古い時代において付帯状況節が内部に対象主語を内在できるという事実によって古代語従属節の分類に一定の修正が迫られるということ、第３点として、形容詞による付帯状況節を通史的に見た場合に形容詞テ形節の衰退が形容詞ママ節の付帯状況用法獲得の契機になった可能性があることが述べられる。

終章では本論文の考察がまとめられ、残された課題と今後の展望について述べられる。

審　査　の　要　旨

１　批評

形容詞テ形節についての歴史的研究は、これまで主として中古語（平安時代語）文法の一項目として簡単に記載されるか、現代語訳を手掛かりにした意味的な問題を軸に論じられることが多く、形容詞テ形の副詞的用法の量的な分布の実態や、古代から現代までの変遷の詳細については未解明の点が非常に多かった。本研究は先行研究のそのような問題を膨大な用例調査によって大幅に解消し、さらに調査結果と文法理論上のアイディアを組み合わせることにより、当該の実態・現象が日本語文法史に与える意味づけに関して従来を大きく上回る知見を得ることに成功した、学界への貢献度の非常に高い研究である。具体的には特に以下の３点が重要である。

第１点は、当該の形容詞テ形節の副詞用法を中心に、従来を圧倒的に大きく上回る規模と詳細さで用例の

調査を行っている点である。当該の現象に対して先行研究の調査はいずれも用例の抽出、対象資料等が貧弱である中、本研究は中心課題である副詞的形容詞テ形の用例はもちろん、関連する形容詞連用形節・ツツ節・ママ節等についてもほとんどの場合全時代の資料を博捜しており、それぞれの時代における調査についても先行研究の質・量を完全に上回っている。これにより従来断片的だった当該現象が、全時代をカバーする通史として、しかも従来よりも圧倒的に詳細な変遷過程を描く形で解明された。

第２点は、隣接する要素への手厚い調査・分析により、日本語文法史上、副詞的形容詞テ形節の変遷が、隣接する諸要素との張り合いの中に、適切な形で位置づけることに成功したという点である。具体的には、当該テ形節と形容詞連用形節のふるまいを比較することにより、両者が大局的には重複・競合的関係から棲み分けの方向に変化していくこと、当該テ形節と形容詞ツツ節のふるまいを比較することにより、当該テ形節の中心部分をなす付帯状況の用法が概ね衰退したのちにそれまで専ら随意用法を担っていた形容詞ツツ節が付帯状況用法を獲得していくという、前者の欠を後者が補う形で変化が起きていることを明らかにした。

第３点は、形容詞テ形節を中心とする付帯状況節のふるまいが、古代日本語の活格性、古代日本語従属節における主格の付与の問題等の、日本語史・日本語文法論における大きな理論的問題と密接に関わることを示した点である。古代日本語の活格性については現在学界で活発な議論が闘わされており、本研究の知見が議論の前進に貢献する可能性は高いと見込まれる。古代日本語従属節の主格付与についても、付帯状況節がおしなべて上代中古において対象主語を内在させることを明らかにした本研究が、古代語主格付与の全体像解明に役立つことは確実である。

一方、課題としては、本研究の知見がもたらす理論的貢献について、先行理論に対する踏み込んだ批判・修正が薄い、という点が挙げられる。日本語の活格性の問題、従属節の格付与の問題について重要な新しい知見を得たことは間違いないが、それが先行理論のどの部分にどのような変更を迫るかについては強い提案がない。しかしながら上記の理論的問題については、先行理論そのものがまだ安定性に欠けることもあり、今後の課題として理論構築を進めるべき課題とも見られるものであって、本論文の知見全体に対する高い評価を揺るがすものではない。

２　最終試験

令和４年１月２５日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。